

令和7年 7月1日	農作物病虫害発生予報 7月	山口県病虫害防除所 山口県農林総合技術センター
--------------	--------------------------	----------------------------

～目 次～

I	予報の概要	1
II	予報	
	【主要病虫害】	2
	【その他の病虫害】	15
III	参考(予報の見方、気象予報)	16

I 予報の概要

農作物名	病虫害名	予想発生量	現 況	
			平年比	前年比
イネ	いもち病(葉いもち)	平年並	多	多
	紋枯病	やや多	—	—
	縞葉枯病(ヒメトビウンカ)	平年並	平年並	前年並
	セジロウンカ	平年並	平年並	少
	トビイロウンカ	平年並	平年並	前年並
	コブノメイガ	平年並	平年並	前年並
	斑点米カメムシ類	多	多	前年並
カンキツ	かいよう病	やや多	やや多	前年並
	黒点病	平年並	平年並	多
	ミカンハダニ	少	少	少
	ナシマルカイガラムシ	平年並	平年並	前年並
ナシ	黒斑病	多	多	多
	黒星病	平年並	平年並	前年並
	ハダニ類	少	少	前年並
果樹全般 (モモ、ナシ、リンゴ)	カメムシ類(チャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシ、クサギカメムシ)	少	少	少

お問い合わせ先

TEL (0835) 28-1211(代)

FAX (0835) 38-4115

E-mail a172011@pref.yamaguchi.lg.jp

II 予報

イ ネ

1 いもち病（葉いもち）

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
平年並	多	多	発病初期

(2) 予報の根拠

- ア 6月11日に周南市の本田で初発生を確認し、初発生時期は平年（6月28日）に比べ早かった。（+）
- イ 6月下旬の巡回調査では、発生ほ場率5.1%（平年0.4%）、発病株率0.6%（平年0.0%）、発病度0.2（平年0.0）で平年に比べ多かった。（+）
- ウ 気象予報では、7月の気温は高い、降水量は少ない、日照時間は多い。また、6月27日頃平年より3週間程度早く梅雨明けした。（-）。

(3) 防除対策

<耕種的防除>

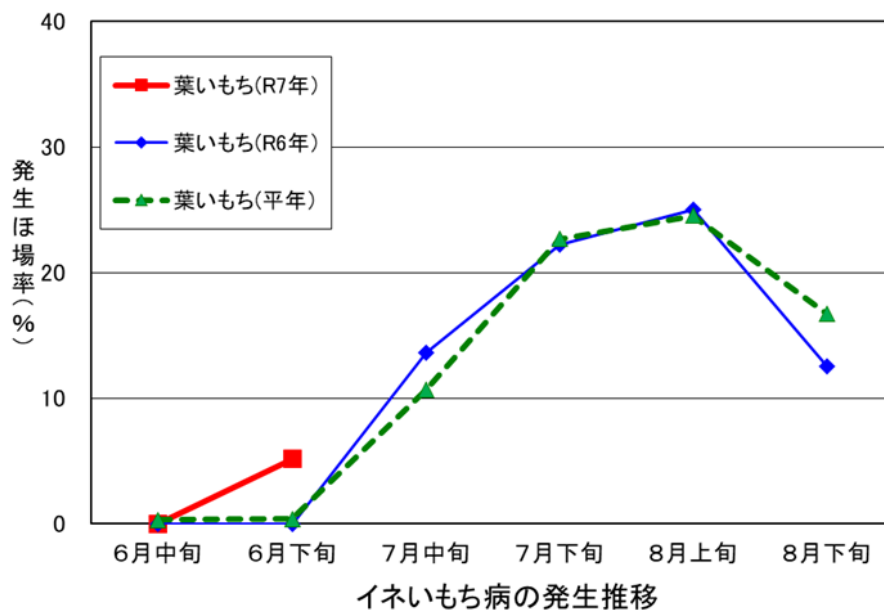
- ア 補植用の置苗は、早急に処分する。
- イ 窒素肥料の多用は避ける。

<防除判断>

急性型病斑を認めた場合は、ブラシン剤、トライ剤、コラトップ剤等、治療効果のある薬剤で直ちに防除する。

<防除のポイント>

穂いもち病の発生を抑えるため、葉いもち病の発病状況を確認し上位葉への進展を防ぐよう適期防除を実施する。



2 紋枯病

(1) 予報内容

予想発生量	防除時期
やや多	幼穂形成期～穂ばらみ中期（出穂25～14日前頃）

(2) 予報の根拠

ア 前年の発生量は多く、伝染源となる菌核の量も多いと考えられる（+）。

イ 気象予報では、7月の気温は高い（+）。

(3) 防除対策

<耕種的防除>

窒素肥料の多用は避ける。

<防除判断>

防除適期は幼穂形成期～穂ばらみ中期（出穂25～14日前頃）で、穂ばらみ中期の発病株率15～20%以上が防除の目安である。

<防除のポイント>

出穂期以降は薬剤散布の効果が劣るので、適期防除を徹底する。

3 縞葉枯病（ヒメトビウンカ）

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
平年並	平年並	前年並	幼穂形成期までに発病が多い場合

(2) 予報の根拠

ア これまでの調査では、縞葉枯病の発生は確認されていない（-）。

イ 6月下旬の巡回調査では、ヒメトビウンカの発生ほ場率20.0%（平年7.6%）、10株当たり虫数0.1頭（平年0.3頭）で平年並みであった（±）。

ウ 気象予報では、7月の気温は高い（+）。

(3) 防除対策

<防除判断>

幼穂形成期までに発病が多い場合は、ウンカ類に効果のある薬剤で直ちに防除する。

<防除のポイント>

ほ場での発生や今後の発生予察情報に注意する。

4 セジロウンカ

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
平年並	平年並	少	7月中旬～穂ばらみ中期（出穂25～14日前頃）

(2) 予報の根拠

- ア 5月25日～6月24日の予察灯（県内3か所）の誘殺数は49頭（平年39.3頭）で平年に比べやや多かった（+）。
- イ 6月下旬の巡回調査では、発生ほ場率8.8%（平年17.3%）、10株当たり虫数0.1頭（平年0.6頭）で平年並みであった（±）。
- ウ 下旬の20回すくい取り調査では、発生ほ場率38.0%（平年23.6%）、1ほ場当たり虫数0.9頭（平年1.5頭）で平年並であった（±）。
- エ 気象予報では、7月の気温は高い（+）。

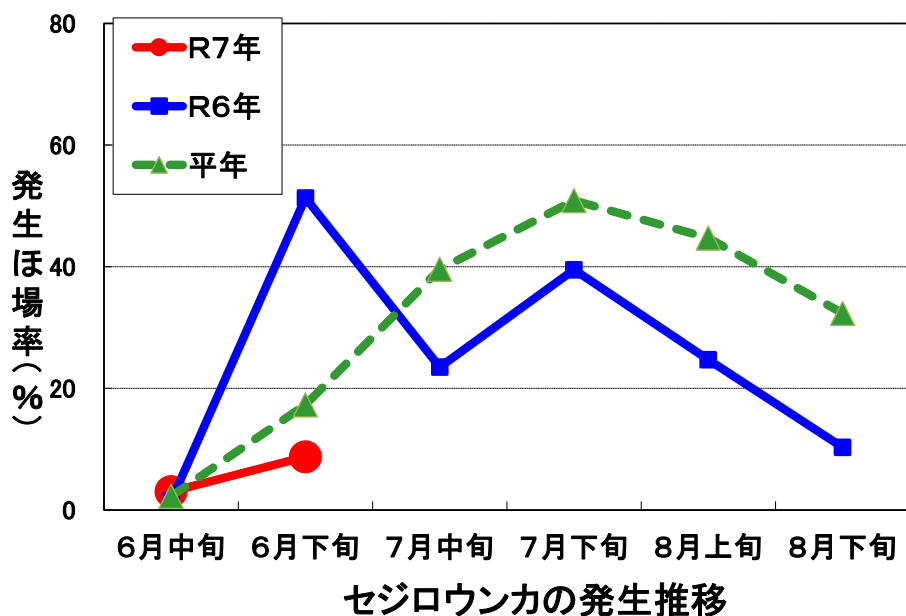
(3) 防除対策

<防除判断>

- ア 防除の目安は、飛来がみられる7月中旬頃までは成虫で株当たり10頭以上である。
- イ 穂ばらみ中期（出穂14日前頃）までに成虫、幼虫を含めて株当たり50頭以上の発生があれば、褐変穂を生じる恐れがあるので薬剤防除を行う。

<防除のポイント>

- ア ほ場での発生や今後の発生予察情報に注意する。
- イ 飼料用米では多発する場合がありますので注意する。



5 トビイロウンカ

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
平年並	平年並	前年並	幼虫最盛期（発生予察情報等を参照）

(2) 予報の根拠

ア 5月25日～6月24日の予察灯（県内3か所）の誘殺数は0頭（平年0頭）で平年並みであった（±）。

イ 6月30日現在、巡回調査および各種トラップでは、本種は確認されていない（－）。

ウ 気象予報では、7月の気温は高い（＋）。

(3) 防除対策

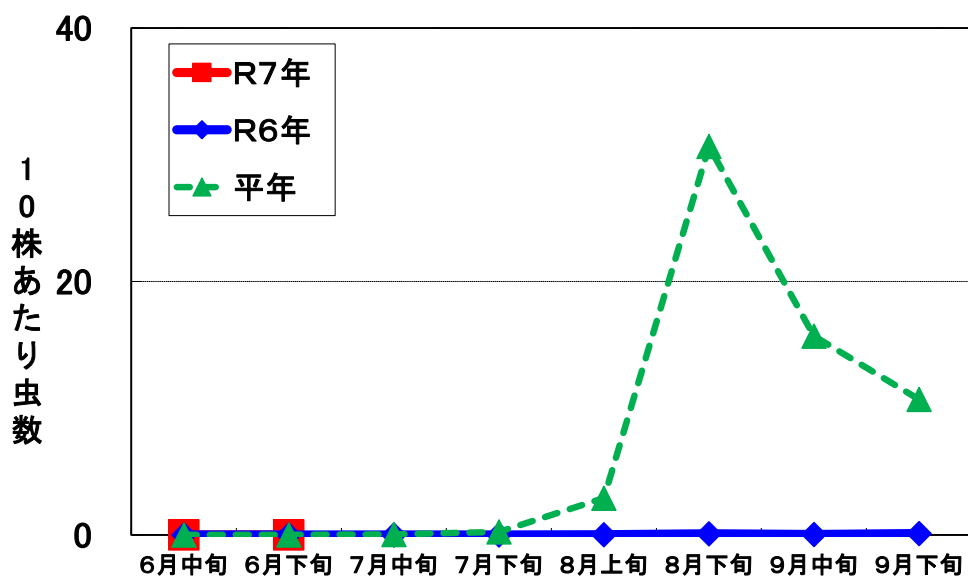
<防除判断>

ア 防除の目安は、6月下旬～7月中旬（飛来時）は10頭/100株、7月下旬～8月上旬（成幼虫）は20頭/100株以上である。

<防除のポイント>

ア ほ場での発生や発生予察情報に注意する。特に、直播など箱施用剤を使用していないほ場では注意が必要である。

イ 出穂後は薬剤が株元にかかりにくいため、出穂前防除を徹底する。



トビイロウンカの発生推移

6 コブノメイガ

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
平年並	平年並	前年並	成虫最盛期の7日後（粒剤は成虫最盛期）

(2) 予報の根拠

ア 6月23日、下関市のフェロモントラップで初めて確認され、平年に比べやや早かった（平年初確認7月3日）（+）。

イ 6月下旬の巡回調査では発生が認められず平年並みであった（±）。

ウ 気象予報では、7月の気温は高い（+）。

(3) 防除対策

<耕種的防除>

葉色の濃いイネに好んで産卵するため多肥を避ける。

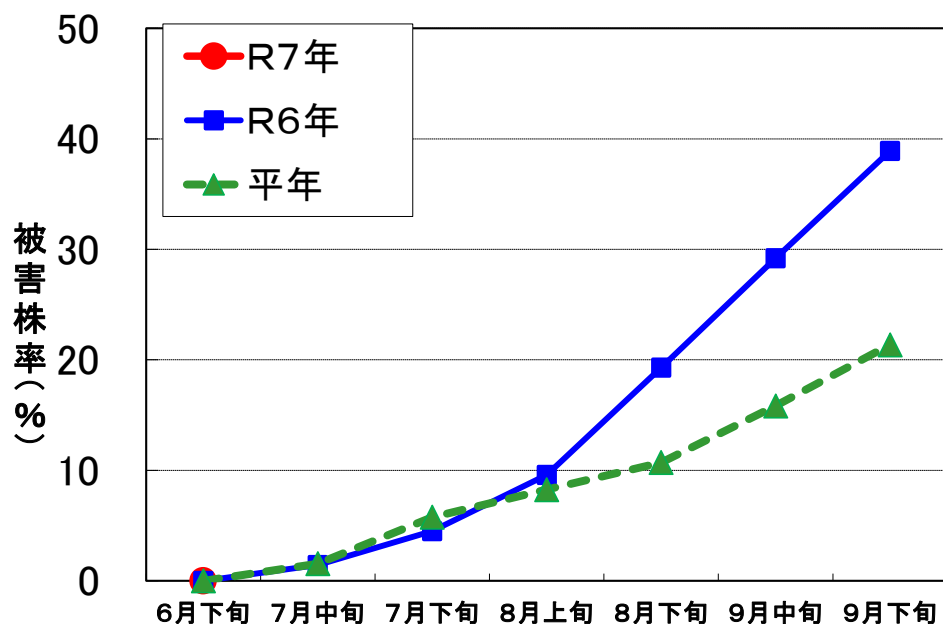
<防除判断>

成虫の払い出し調査(*)で5頭/m²以上であれば液剤は7日後に、粒剤は直ちに散布する。

※1 m程度の棒を持ち、自分を中心にイネの上部を弧を描くように払い、飛び出す成虫の数を数える方法

<防除のポイント>

ほ場での発生や今後の発生予察情報に注意する。



コブノメイガの発生推移

7 斑点米カメムシ類

7月5日～7月13日は県内一斉草刈り推進期間

<https://www.pref.yamaguchi.lg.jp/soshiki/122/22318.html>

(1) 予報内容

予想発生量	現況		防除時期
	平年比	前年比	
多	多	前年並	穂揃期とその穂揃期7日後の2回（ただし、イネカメムシが多い場合は出穂期とその7日後）

(2) 予報の根拠

ア 5月21日～6月20日の予察灯（県内3か所）の合計誘殺数は469頭（平年110.7頭）で平年に比べ多かった（+）。

イ 極早期栽培地域におけるイネ科雑草地の20回すくい取り調査では、1ほ場当たり虫数286.4頭（平年81.2頭）で平年に比べ多かった（+）。

ウ 気象予報では、7月の気温は高い（+）。

(3) 防除対策

<耕種的防除>

出穂2週間前までに畦畔等の草刈りを実施し、それ以後は、エノコログサ、メヒシバ、ヒエ等のイネ科雑草の穂が出ないように管理するとより効果が高い。

<防除のポイント>

ア 穂揃期（80～90%が出穂）と穂揃期7日後の2回の薬剤防除を徹底する。

イ 薬剤を散布した後もほ場でカメムシ類の発生が見られる場合は、さらに7日後に追加防除を実施する。

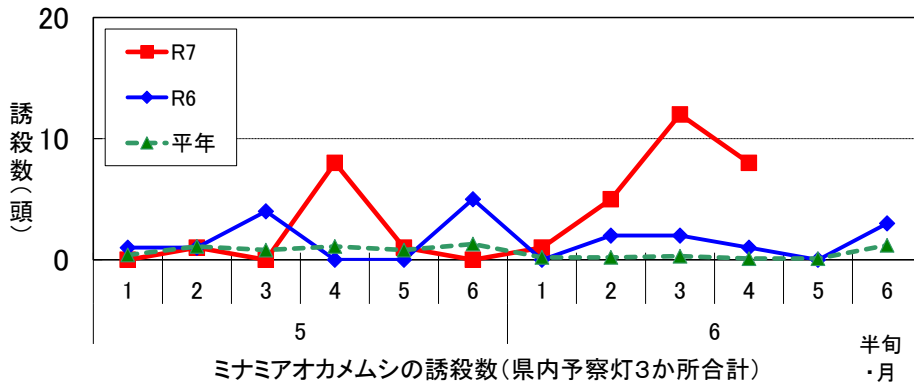
ウ 粒剤で防除を行う場合は、液剤よりも3～4日早く散布する。ただし、大型のカメムシ類に対しては防除効果が劣る。

エ 周囲よりも出穂の早いほ場、休耕地や雑草地周辺のほ場、ヒエ等の雑草の多いほ場はカメムシ類による被害が多くなるので防除を徹底する。

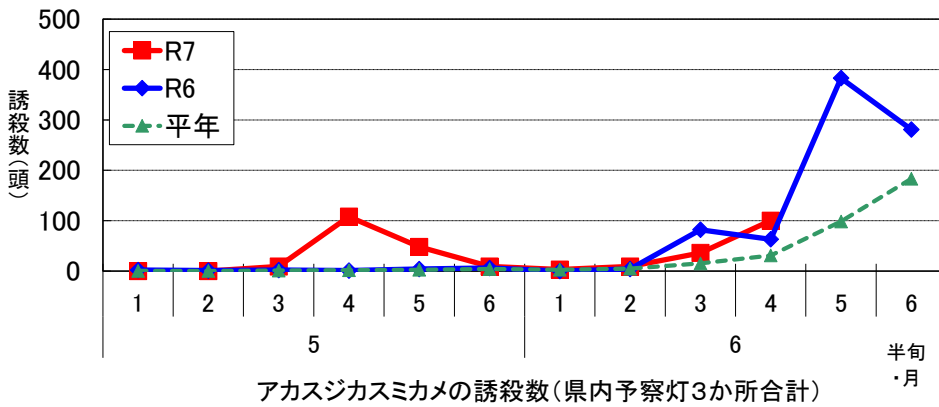
オ 地域で一斉防除を実施すると効果が高い。

カ 畦畔に出穂したイネ科雑草がある場合は畦畔も含めて防除を実施する。

キ 近年、イネカメムシが増加しているため、本種の発生が多い地域ではほ場への飛来に注意し、不稔穂の発生を防ぐために、防除適期である出穂期に薬剤防除を実施する。本種はイネに依存し、畦畔のイネ科雑草では増殖しないとされるため、草刈りでは抑制できないことに留意する。



ミナミアオカメムシ
体長15mm程度



アカスジカスミカメ
体長4.6-6mm

カンキツ

1 かいよう病

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
やや多	やや多	前年並	幼果期及び台風の襲来前

(2) 予報の根拠

ア 6月下旬の巡回調査では、発生ほ場率10.5%(平年8.2%)、発病葉率2.2%(平年1.0%)、発病果率1.2%(平年0.2%)でやや多かった(+)。

イ 気象予報では、7月の降水量は少ない(-)。

(3) 防除対策

<防除判断>

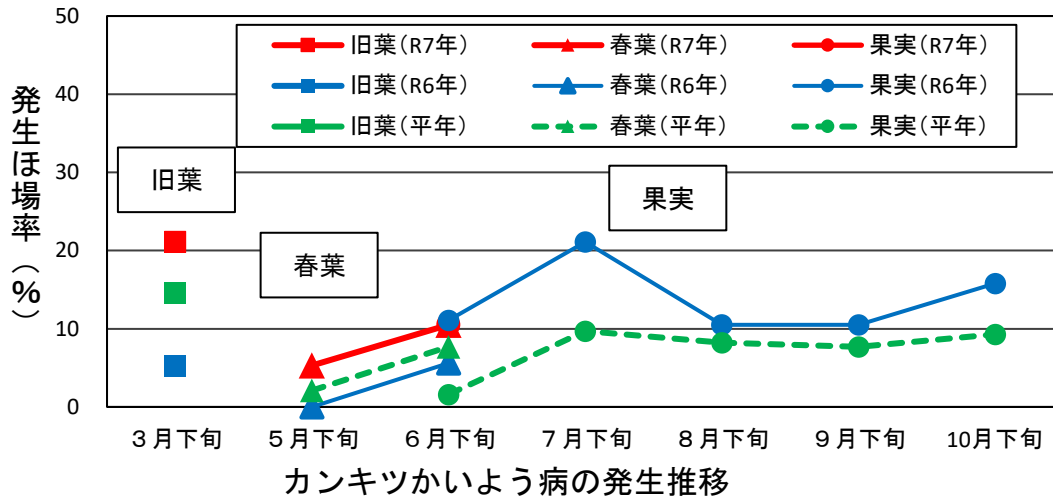
ア 本病が発生し、6月下旬に防除を実施していない場合は、7月上旬に防除を実施する。

イ 本病が発生し、既に6月下旬の防除を実施した場合は、新たな病斑の増加が認められる場合に防除を実施する。

ウ 台風襲来の恐れがある場合は、事前に防除を実施する。

<防除のポイント>

- ア 発病した枝や葉は、伝染源となるので除去する。
- イ 防風樹や防風ネットなどの防風対策を実施し、茎葉の損傷を防ぐ。
- ウ ICボルドー66Dは、高温期に使用すると薬害を生じやすいので、7月から9月の間は使用しない。
- エ 夏秋梢はミカンハモグリガの被害が発生しやすく、本病の発生を助長するので、できるだけ除去する。幼木や隔年交互結実園の遊休樹など夏秋梢を残す場合は、ミカンハモグリガの防除を徹底する。



2 黒点病

(1) 予報内容

予想発生量	現況		防除時期
	平年比	前年比	
平年並	平年並	多	防除後の累積降水量が200～250mmに達したとき 降水量が少ない場合は、防除後1か月を経過したとき

(2) 予報の根拠

- ア 6月下旬の巡回調査では、発生ほ場率5.3%(平年12.1%)、発病果率0.1%(平年1.2%)で平年並みであった(±)。
- イ 気象予報では、7月の降水量は少ない(-)。

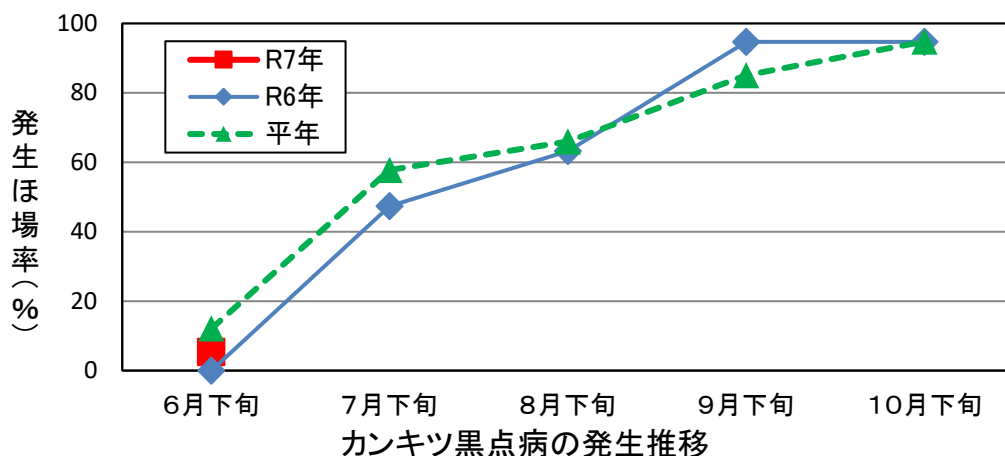
(3) 防除対策

<防除判断>

予防散布が基本なので、予報内容の防除時期に合わせて防除を実施する。

<防除のポイント>

- ア 樹冠内の枯れ枝や放置された剪定枝は本病の伝染源となるので、園外に持ち出し、処分する。
- イ 「せとみ」は病斑が大きくなり、外観品質に及ぼす影響が大きいため、適期防除に努める。



3 ミカンハダニ

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
少	少	少	発生初期

(2) 予報の根拠

ア 下旬の巡回調査では、発生ほ場率10.5% (平年36.5%)、寄生葉率0.2% (平年5.2%)で平年に比べ少なかった(－)。

イ 気象予報では、7月の気温は高く、降水量は少ない(+)。

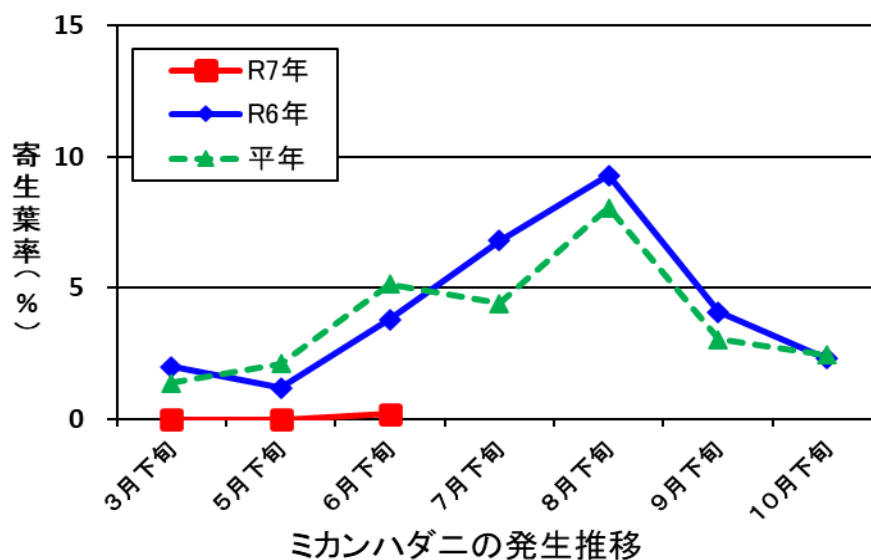
(3) 防除対策

<防除判断>

雌成虫の寄生葉率30~40%以上、または雌成虫1葉当たり0.5~1頭以上の場合、防除を実施する。

<防除のポイント>

発生量はほ場によって大きく異なる。定期的にはほ場を見回り、発生状況を確認する。



4 ナシマルカイガラムシ

(1) 予報内容

予想発生量	現況		防除時期
	平年比	前年比	
平年並	平年並	前年並	常発園または昨年多発した園では直ちに、それ以外の園では梅雨明け直後

(2) 予報の根拠

ア 6月下旬の巡回調査では、発生ほ場率5.3%(平年6.2%)、寄生果率0.4%(平年0.3%)で平年並みであった(±)。

イ 気象予報では、7月の気温は高く、降水量は少ない(+)。

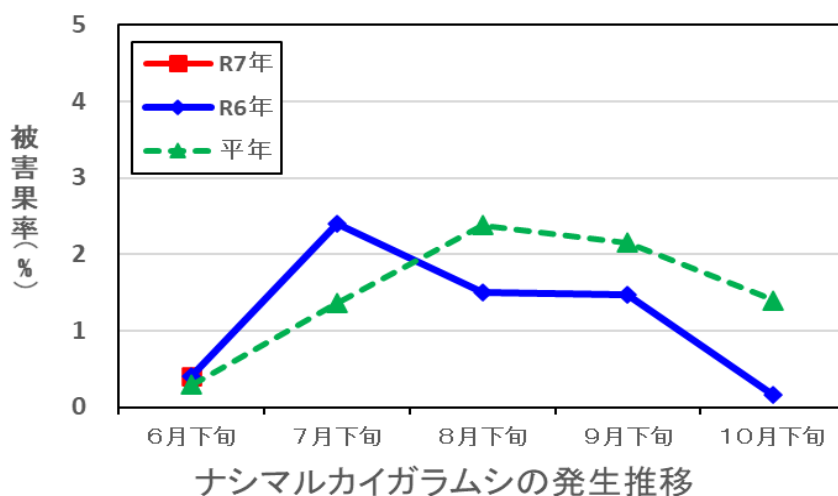
(3) 防除対策

<防除判断>

前年の発生量が大きな影響を与えるため、常発園または昨年多発した園では防除を実施する。

<防除のポイント>

第2世代幼虫の発生期は7月中旬から下旬と幅広いため、薬剤防除(アプロード剤:殺虫剤コード16、コルト剤:殺虫剤コード9B)は、ふ化直後(歩行幼虫)の効果が高いため、散布時期が遅れないように注意する。



ナシ

1 黒斑病

令和7年5月30日付け令和7年度農作物病害虫発生予察技術資料第2号参照

<https://www.pref.yamaguchi.lg.jp/soshiki/122/22318.html>

(1) 予報内容

予想発生量	現況		防除時期
	平年比	前年比	
多	多	多	7~10日間隔で防除

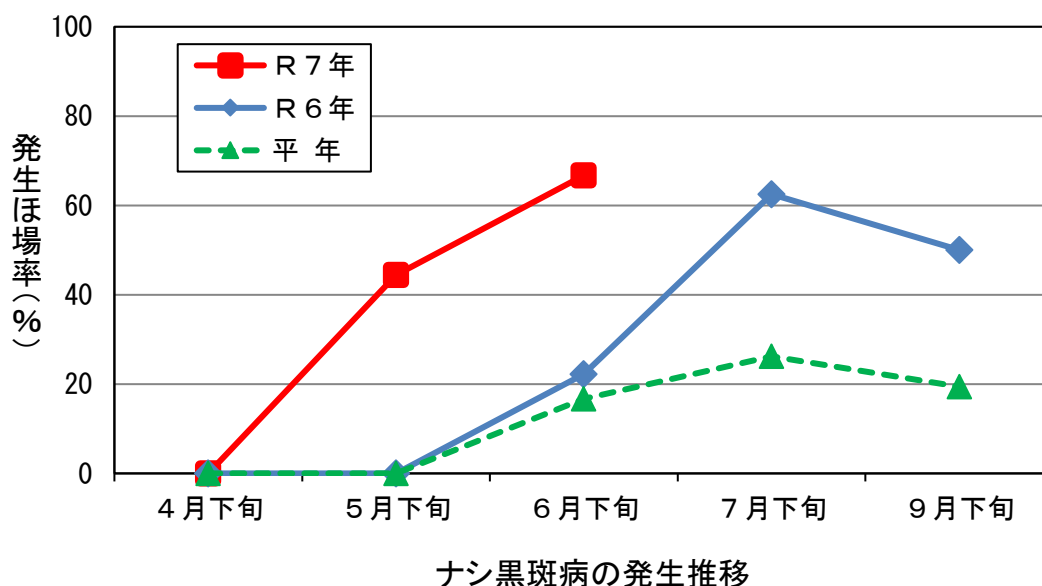
(2) 予報の根拠

- ア 6月下旬の巡回調査では、発生ほ場率66.7% (平年16.7%)、発病葉率0.9% (平年0.1%)、発病新梢率2.6% (平年0.5%)で平年に比べ多かった (+)。
- イ 気象予報では、7月の降水量は少ない (-)。

(3) 防除対策

<防除のポイント>

- ア ほ場を定期的に見回り、落下した果実は拾い集め、園外に持ち出し処分する。
- イ 7月は、徒長枝での発病が多くなる時期なので、徒長枝の先端まで薬剤がかかるよう、丁寧に散布する。
- ウ ストロビー剤 (殺菌剤コード11)、ポリオキシシン剤 (殺菌剤コード19) では耐性菌が出現しているため、防除の後必ず防除効果を確認し、防除効果が劣る場合は、他の薬剤を使用する。



2 黒星病

(1) 予報内容

予想発生量	現況		防除時期
	平年比	前年比	
平年並	平年並	前年並	7月上旬ごろまで

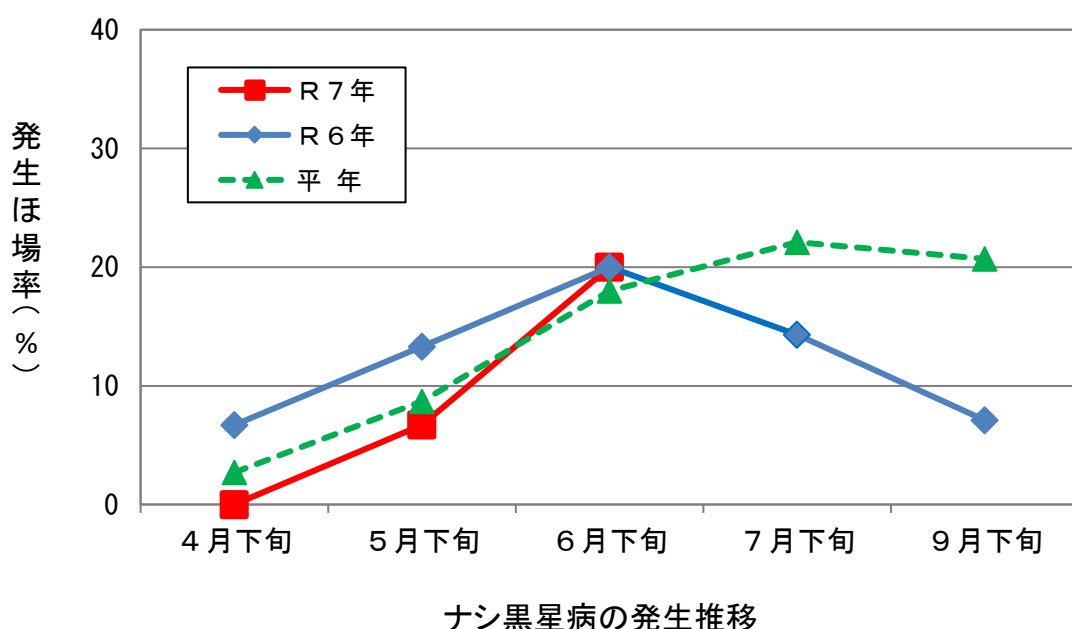
(2) 予報の根拠

- ア 6月下旬の巡回調査では、発生ほ場率20.0% (平年18.0%)、発病葉率0.7% (平年0.8%)で平年並みであった (±)。
- イ 気象予報では、7月の降水量は少ない (-)。

(3) 防除対策

<防除のポイント>

- ア 発病した果実や葉は伝染源になるので、見つけ次第除去するとともに、ほ場外に持ち出し、適切に処分する。
- イ 本病が発生している場合は、治療効果があるQoI剤（殺菌剤コード11：ストロビー、アミスター、ファンタジスタ等）、SDHI剤（殺菌剤コード7：フルーツセイバー、パレード等）で直ちに防除を実施する。
- ウ 7月は、本病原菌が「幸水」の果実に感染しやすくなる時期なので、防除を徹底する。
- エ 薬剤が果実と新梢にかかるよう、丁寧に散布する。
- オ 薬剤耐性の発達を防止するため、同一系統の薬剤を連用しない。
- カ ベンレート剤（殺菌剤コード1）、ルビゲン剤（殺菌剤コード3）では耐性菌が出現しているので、防除の後必ず防除効果を確認し、防除効果が劣る場合は、他剤を使用する。



3 ハダニ類（クワオオハダニ、ナミハダニ）

(1) 予報内容

予想発生量	現況		防除時期
	平年比	前年比	
少	少	前年並	発生初期

(2) 予報の根拠

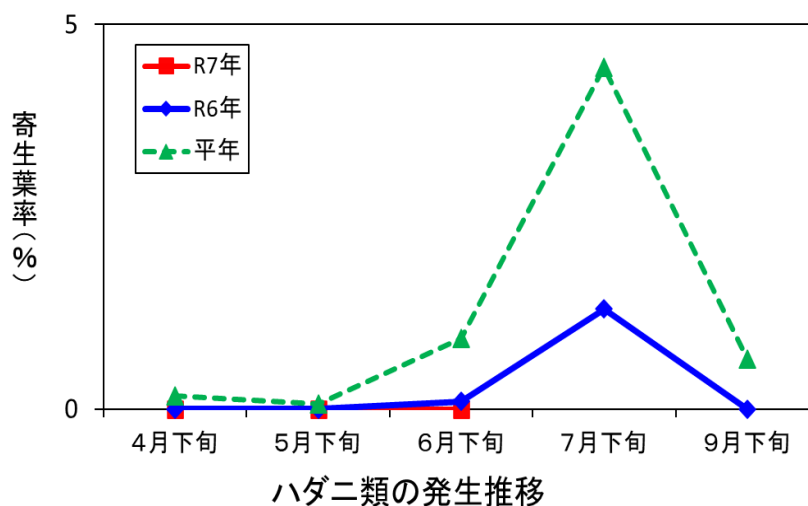
- ア 6月下旬の巡回調査では、発生ほ場率0%（平年8.7%）、寄生葉率0%（平年0.9%）で平年に比べ少なかった（-）。
- イ 気象予報では、7月の気温は高く、降水量は少ない（+）。

(3) 防除対策

<防除のポイント>

ア 乾燥期にハダニ類が多発すると早生種では葉焼けが助長され、早期の落葉を招くので、防除を徹底する。

イ 薬剤防除の際は収穫前日数に注意の上、かけむらがないよう十分な量で丁寧に散布する。



果樹全般 (モモ、ナシ、リンゴ)

1 カメムシ類 (チャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシ、クサギカメムシ)

(1) 予報内容

予想発生量	現況		防除時期
	平年比	前年比	
少	少	少	園地への飛来を確認した時

(2) 予報の根拠

ア 5月21日～6月20日の予察灯(県内4か所)における誘殺数は11頭(平年139.1頭)で平年に比べ少なかった(－)。

イ 5月26日～6月25日のフェロモントラップ(県内4か所)のチャバネアオカメムシの誘殺数は47頭(平年1762.4頭)で平年に比べ少なかった(－)。

ウ スギ・ヒノキの毬果量調査(県内6か所、6月下旬調査)では、スギ・ヒノキの着果程度は平年に比べやや多かった(－)。

エ 気象予報では、7月の気温は高く、降水量は少ない(+)。

(3) 防除対策

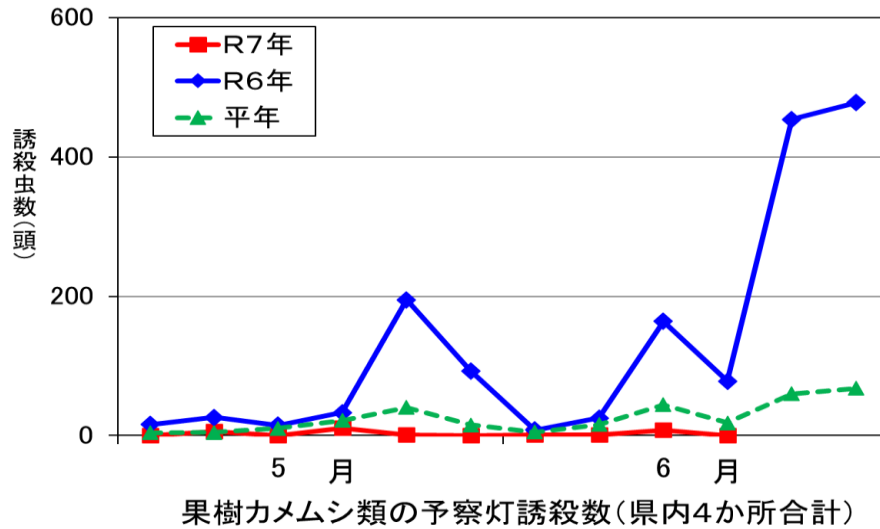
<防除判断>

園地内への飛来を確認したらすぐに薬剤散布を行う。ライトトラップ※を利用すると飛来を確認しやすい。

※ 園地内ライトトラップによる防除判断マニュアルは、山口県病害虫防除所ホームページ「主な病害虫の発生生態と防除対策資料」に掲載している。今後の発生予察情報に注意する。

<防除のポイント>

- ア 園地での発生状況を定期的に確認し、飛来が認められるようなら薬剤散布を行う。
- イ 有袋栽培であっても、果実肥大により果実が袋に接した時期に加害されるので注意する。
- ウ カメムシ類に対する薬剤散布によって、ハダニが増殖する可能性があるため、発生状況に注意する。



【その他の病害虫】

作物名	病害虫名	予発 生 量	現況		発生ほ場率		備考
			平年比	前年比	本年 (%)	平年 (%)	
イネ	ツマグロ ヨコバイ	少	少	少	8.8	8.0	
	イチモン ジセセリ (イネツ トムシ)	多	多	多	5.0	1.4	防除適期：予想若齢幼虫最盛期（7月下旬）葉色が濃く軟弱な生育の場合被害が大きい。
	ニカメイ ガ	平年並	平年並 (予察灯)	平年並 (予察灯)	0	0	チョウ目害虫に効果のある長期持続型箱施用剤を利用している場合追加防除は必要ない。
カンキツ	そうか病	やや多	やや多	少	36.8	12.7	発病葉、枝は除去してほ場外に持ち出し、適切に処分する。

Ⅲ 参考

1 予報の見方

(1) 病害虫発生量の基準（原則として過去10年間の発生量と比較）

ア 平年比

多	やや多いの外側10%の度数の入る幅
やや多	平年並の外側20%の度数の入る幅
平年並	平年値を中心として40%の度数の入る幅
やや少	平年並の外側20%の度数の入る幅
少	やや少ないの外側10%の度数の入る幅

注1：平年値は過去10年間の平均

注2：過去の発生量との比較を表すもので、被害や防除の必要性とは異なる

イ 前年比

多	平年比の5段階評価で区分し、前年の評価より多い発生
少	前年の評価より少ない発生
前年並	前年の評価と同等の発生（上記2項目を除くもの）

(2) 病害虫発生時期の基準（原則として過去10年間の発生時期と比較）

早 い	過去10年間の平均値より6日以上早い
遅 い	より6日以上遅い
やや早い	より3～5日早い
やや遅い	より3～5日遅い
平年並	を中心として前後2日以内

注：

(3) 予報根拠における発生要因の評価基準

+	発生を助長する要因
±	発生の助長及び抑制に影響の少ない要因
-	発生を抑制する要因

2 気象予報

(1) 概要

1 か月気象予報（6月26日福岡管区气象台発表）

予 報	低 い (%) 少 ない	平年並 (%)	高 い (%) 多 い
気 温	1 0	1 0	8 0
降 水 量	5 0	3 0	2 0
日照時間	1 0	3 0	6 0

週ごとの気温傾向

予 報	低 い (%)	平年並 (%)	高 い (%)
1 週 目	1 0	1 0	8 0
2 週 目	1 0	1 0	8 0
3～4 週 目	1 0	2 0	7 0